

# 体育授業における小学生のメタ認知構造についての検討

播磨 栄治 (高知大学教育学部保健体育教育コース)

## I. 研究目的

本研究では、体育授業における小学生のメタ認知構造を明らかにする。また、体育授業での学びの経験および好感度とメタ認知構造について関係を明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

留め置き法による質問紙調査を実施した。

高知県内の小学校3校5.6年生206人

調査項目は、体育におけるメタ認知測定項目17項目、体育授業での学びの経験5項目の計22項目であった。回答は、各項目に対し、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」3件法で実施し、得点化した後、集計、分析した。

## III. 結果・考察

### 1. メタ認知構造の因子分析

メタ認知測定質問項目17項目について、全児童を対象として、プロマックス回転(一般化された最小2乗法)による斜交回転を行った。原則各因子を構成している因子負荷量0.4以上の項目について、検討を行った。

第1因子には、「17.先生の説明を聞いていると、自分の考えがまとまることがある。」「15.グループで話し合いをしていると、自分の考えがまとまることもある。」など6項目が示された。これらを構成している項目には、「自分の考えがまとまることもある」といった言葉がみられたので、『思考の明確化』と命名した。

第2因子には、「12.計画通りにできたかどうか、ふり返るようにしている。」「6.計画通りに進んでいるかどうか、確認するようにしている。」など5項目が示された。これらを構成している項目には、「ふり返る」「確認する」といった言葉がみられたので、『思考の省察』と命名した。

第3因子には、「2.今まで習ったことを思い出し

ながら、予想を立てるようにしている。」「3.グループの話し合いで友達の意見を聞いて、自分の意見を考え直すことがある。」など3項目が示された。これらを構成している項目には、「予想を立てる」「自分の意見を考え直す」といった言葉がみられたので、『思考の自己調整』と命名した。

また、各因子のクロンバックの信頼度係数は、『思考の明確化』( $\alpha=0.856$ )、『思考の省察』( $\alpha=0.835$ )、『思考の自己調整』( $\alpha=0.783$ )であった。これらの結果から、すべての因子は $0.783 \leq \alpha \leq 0.856$ であり、各因子の内部一貫性が保証されたと考えられる。

### 2. メタ認知因子と体育授業での学びの経験

メタ認知因子と体育授業での学びの経験の影響度を調べるために重回帰分析を行った。その結果、メタ認知因子と体育授業での学びは $p < 0.01$ 水準で有意な正の相関関係を示した。また「情意」「技能」には『思考の自己調整』、「体力」には『思考の明確化』、「認識」「社会」には『思考の自己調整』『思考の明確化』が影響していることがわかった。

## IV. 結論

1.小学生のメタ認知構造の因子分析を行った結果、3因子が抽出され、第1因子は、『思考の明確化』、第2因子は『思考の省察』、第3因子は『思考の自己調整』と命名した。

2.小学生の体育授業での学びの経験および好感度とメタ認知因子間の影響度では、『思考の明確化』『思考の自己調整』因子に有意な関連性を示した。

以上のことから、小学校の体育授業におけるメタ認知構造は、3因子であること、また、メタ認知は体育授業での学びの経験および好感度に影響していることが明らかになった。新学習指導要領に示された「主体的対話的な深い学び」を実現するためには、体育授業において、子どもたちの「メタ認知」能力が重要となってくることが考えられる。